

## 「経験欠乏の現代」の根本問題：提供の可能性の視点から

有源探, ジェラード  
九州大学大学院博士後期課程2年

<https://doi.org/10.15017/8053>

---

出版情報：飛梅論集. 6, pp.1-22, 2006-03-24. 九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻教育学  
コース  
バージョン：  
権利関係：

# 「経験欠乏の現代」の根本問題

— 提供の可能性の視点から —

有源探 ジェラード\*

## 問題提起

現代は社会的状況や生活環境の絶えない変貌の時代である。数十年前の生活や習慣を回想すると、現状との乖離を痛感することが多いだろう。また、日本において、高度経済成長の時期に抱かれた未来に対する期待感と充実した生活の実現は徐々に薄れてゆき、今となつては、何か大切なものを失ったと感じるようになった。それは現代の生活環境や生活様式の変容における人間関係の希薄化や都市化による自然環境との関わり方の希薄化と見なすことができよう。それは換言すれば、現代に生きる人間を豊かにしてくれる様々な出来事の実験の欠乏を意味している。

そのような「経験の欠乏」たる状態は近年、教育の問題として指摘され、今日に至って「体験の提供」の形式で、諸々の対策が提案され、実施されてきた。なるほど、教育学の課題としての重要性は否めないが、「欠乏してきた」経験を指摘することができても、その欠乏を克服すべき効果的な方策は模索中の段階にあるということもいえる。他方、近年の学校や教育行政に遥かに先行して、社会の多くの領域において、旅行・観光・娯楽業界を中心に、既に多様な「○○体験<sup>1</sup>」が提供されていたこともあって、市場にも、経験・体験の視点は強く促進されてきたことを忘れてはならない。そのような「経験の視点」への集中は何を意味するのか。少なくとも、それは現代における経験が教育の分野に限った問題ではないということであり、経験論を狭義の教育論としてのみ扱うことができないということであろう。もしかすると、単なる従来の経験世界の一部喪失ではなく、「経験」それ自体を捉える社会的観念の転回に関わる問題であるかもしれない。だとすれば、「経験」に対する態度変容へと議論の枠組みを拡張し、どのように変わったのかを検討しなければ、その問題の根底に触れることはできない。その問題について考えるためには、対策の提供者の側としてのみならず、「欠乏」状態を被るはずの人々の側からして、彼らがおかれている生活状況において如何なる経験をするかということを追究する必要がある。経験の欠乏が主張されるなか、経験は今、どのように生きられるか。そして結局、経験に何が欠乏しているのか。それらの問いに対して、以下の論述で考察し、明らかにしていきたい。

---

\*九州大学大学院博士後期課程2年

## I. 経験における「過程」と「結果」の要素

経験についての議論は観点や言説を問わず、経験の発端を未知なる状況や異質なものと経験する当人（以下「当人」と記す）との関わりにおいて見出すのは共通の視点であろう。だが、その経験を通じて、異質性に対する態度において各論が分かれる。経験について考えることは、二つの要素の関わりについて考えることである。それらの要素とは経験の「過程」と「結果」である。即ち、経験を論ずることは常に、過程と結果をめぐっての言説を展開することである。過程と結果を如何なる関係性のもとで捉えるかによって、経験がもたらすもの（結果）と経験の範囲が異なってくる。しかしまず、過程と結果とは具体的に、どのようなものかを述べなければならない。

経験の過程とは、当人と異質なものと接触を発端に、生起する様々な出来事とそれに対する当人の反応、決断、行為の道筋のことをいう。一言でいえば、当人と他者・環境との間に生じる関わり、関係性である。何らかの結果にはまだ至らないところの進行形の経験である。それは別のところで、「経験の場」<sup>2</sup>と呼んだもので、ひとつの経験として完結していない、形成途上の経験の要素である。

一方、経験の結果とは、単にある具体的な目的の達成あるいは意図された行為の完結だけではない。それは、「経験の場」を去ったのちに、結果として残る「跡」、経験として語られる経験の物語、もしくは経験の表象である。つまり経験の結果とはその表象化のことである。人は自分の経験を語る時に、経験そのものではなく、表象化可能な部分しか語れないのだ。だが当人にとって、自分が経験したことは、その表象より遥かに多様であり、表しがたい部分もある。そしてそもそも、語る可能性とは別にして、単に語られてない、記憶や印象に留まる経験も多いだろう。その経験世界の語り方は一般的に受容される解釈枠組みから逸脱<sup>3</sup>することもありうる。

さて、本論での経験の過程と結果について明記したところで、経験における異質性に対する態度に戻ろう。経験は自ずと何々経験としてあるのではなく、当人が後にそれを何々経験として表象する。概して二つの立場を考えることができる。第一に、異質性を既存の意味秩序に回収することによって理解しようとする立場、そして第二に、異質性と関わり、自ら意味秩序から逸脱し、関係を新たに創設しようとする立場である。それぞれについて以下に詳述していきたい。

### 1) 意味秩序への回収

経験は世界・社会の仕組みの理解を促すとよくいわれる。つまり、経験を通じて、自分が生活している社会的な文脈や自分を囲んでいる環境についての経験的な知識を獲得することによって、それをより深く理解するということである。確かに、属する社会の規範やそれが要求する態度を経験的に学ぶことが多い。個人が経験することは人間形成において重要なことであり、確実な自己としての「人間」を到達点とする道の道標である。また、そのような経験はより広い範囲で、科学的な世界理解の客観性を可能にし、世界の出来事を統一した意味体系として捉えるために不可欠な営みである。

当人と異質なものと関わりのひとつの契機である経験を主流の学問的観点から捉えるとき、経験の営みを以下のように理解することができる。即ち、経験とは「特定の行為者が行為Aとその結果たる知覚経験Eとの因果関係「A→E」を通り抜けたことによって得た知識を意味する」<sup>4</sup>ということである。異質で不確実な状況を把握し、かつそれを確定した、操作できる対象に変えていく主体的統合の働きであり、異質なものと関わりとはここで、その異質性を既存の世界解釈の秩序に回収し、経験を通じて理解することである。

それを経験の維持・拡張的な側面と呼びたい。なぜなら、既存の世界認識を前提とし、新しい経験から獲得した知識（勿論、それはその既存の秩序において整合性を持った妥当な知識である限り）によってその秩序を維持し、拡張していくからである。当人はここで、経験の主体であり、統制者である。そして異質性に対して、秩序のうちに統制することを目的としている。先ほど挙げた過程と結果との関係としては、ここで、経験の過程が経験の結果へと従属している。なぜなら、過程と結果は因果関係によって結ばれ、経験における特定の操作（過程）はその意図された目的（結果）に到達するための妥当な手段もしくは方法であるからだ。その文脈では経験とはその方法を知るようになることである。最初から、異質性を対象化し、共約可能な対象に還元するのが目的であるゆえ、そのことができる操作（過程）が唯一、過程と結果との因果関係を成立させるものである。そうして、異質なものを既存の秩序において対象化し、分類することができ、一般化可能な形式で説明できることによって経験を反復可能な、検証可能な、完結した出来事として捉えることができる。即ち、その類の経験を万人が確実にそして等しく共有できるものである。

## 2) 意味秩序からの逸脱

しかし他方、人の経験世界は科学法則の自覚、もしくは社会規範の会得によってのみ成立つのではない。人を人間にするのに「教育的」ともいふべき経験が不可欠であるとはいえ、人の経験世界はこれに尽きるのではあるまい。

異質性に対する別の関わり方もある。それは日常の有用性や既知や規範を超えて、その外部からやってくる異質な出来事と当人との出遭い<sup>5</sup>としての特異な関係性である。それは日常の秩序や既知を逸脱するゆえ、それを「逸脱経験」<sup>6</sup>と呼ぶ。当人はここで、経験の主体ではないので、目的（結果）への到達を統制できない。むしろ、その結果を決定するのは両者の間の関係過程である。出遭いにおいて、経験の結果は経験の過程に従属するのである。なぜなら、当人と異質なものと関わりの過程において、未確定である結果の無数の可能性が開かれているので、一般化・反復不可能な経験でもある。当人の態度や決断によって、一回限りの経験を「ある」結果に導く。それは特定の操作過程を通じて確定できる結果ではないが、だからといって共有できないわけではない、以降の論述で明らかにされるように、「逸脱経験」は特異な形で、共有される可能性を持つ。如何なる予想や打算を逃れるもので、対象として捉え難く、範疇や分類を逃れる。即ち、その類の経験に、確実に、共有可能な結果をもたらす一連の操作はなく、その経験の「理解」を促す整合性のある説明もない（そもそも、既存の意味秩序に回収されないものであるゆえに）。冒険に伴うある種

の危険性を孕むのである。しかし他方、固定した秩序を逸脱することによって変容や創造をもたらす次元でもある。それは経験の変容・創造的な側面である。例えば旅、芸術、遊びを通じて、そのような創造的な出遭いの経験はときとして生じる<sup>7</sup>。

また、以後に述べるように、学問的な発見や新しい解釈枠組みの提唱を促す可能性も持つ。従来の世界観を覆すほどの学説は決して、既存の知的秩序を維持・拡張するものではない。むしろ、その解釈枠組みの妥当性に反するものである。最初は、その文脈から「異端思想」の如き扱いを受けが、やがてその学説のもつ創造性は旧来の秩序を変容させ、以前のとは違った新しい意味秩序を創り出すことがある。

よって、経験とは単に世界を理解する契機であるだけではなく、世界と別様に関わる契機でもあるといえよう。但し、異質的なものとの関わりにおいて、過程と結果の関係の捉え方によって、異なったふたつの経験形式があるということではない。むしろ双方の間には密接な関係がある。では、どのような相関性をもつかを次の議論で整理しておきたい。

### 3) 異質性に対する二つの態度の相関性

逸脱経験はその不確実性のゆえに、客観的対象として捉え難く、人間の共同生活における目的性や有用性への要請から外れるものとして、教育学や実証的な社会科学の研究として殆ど論じられていない<sup>8</sup>。なぜなら、ある種の危険性を孕むものであるからだ。社会秩序を脅かす危険、「正常」とされる発達を阻む危険などが挙げられる。だが他方、別途の創造性であり、別様の関係としての経験の可能性を示唆するものでもある。

教育の意図を超えて、経験によってもたらされたものはすべて非教育的だと断言できるのだろうか。後に示されるように、異質なものにも何かの教えが潜んでおり、形成の意図や働きなしに、形成を副次的に促す。しかし、それは特定の方法で学べば獲得できるものではないし、万人が確実にそして等しく会得できるものでもない。それは必ずしも、了解の次元に回収できるとは限らない。なぜなら了解の基準はいつも制度的に規定されるからである。

そのような性格は逸脱経験が軽視される理由だろうが、経験における二つの関係性のあり方は対立・独立した領域ではない。「有用な経験」と「危ない経験」の二元論はない（また、「善い」経験と「悪い」経験を区別する基準も経験それ自体には存在しない）。

異質性との接触から始まる経験それ自体には様々な展開の可能性があり、その全ての可能性は経験の「結果」としてありうる。それらの結果のうち、望ましく、有意義な結果だけを経験と見なすのは、経験という冰山に対して一角だけを見て論ずることのようである。水面下の部分も同じ経験の一部である。その捉えがたい、不確実な部分は経験の二つの要素である過程と結果の相関関係を流動的なものにし、人間の多様な変容の可能性の原動力である。例えば、ガリレオ (Galilei, Galileo) やダーウィン (Darwin, Charles R.) はある意味で、「偉大なる逸脱者」と呼べるかもしれない。彼らの学説はその時代の世界観、つまり正誤を決定する規範から逸脱していたが、やがて新しい世界観の構築に貢献した。彼らが生きていた社会に絶大な変容をもたらしたとともに当時の規

範にとって脅迫でもあった。勿論、すべての逸脱経験はそのようなものではないが、少なくとも、その経験を貫いた当人に何らかの変容をもたらすという点では、共通するのである。変容とはここで、発達のように「よりよい状態へ」の変容とは限らない。なぜならその状態の「よさ」を判断する基準はその経験にはないからである。それは当人の以前の状態に加わる、ときに以前の状態に変化を起こすものである。当人は「世界をよりよく知る」という自己発展ではなく、「世界を別様に関わることによって、変容する」という自己創造、自己生成である。人間は常に、社会規範を維持する傾向と社会規範を変容させる傾向の間を行き交う存在であると瀬戸賢一はいう。彼曰く、我々には心理的・意味論的に相反する二つの傾向がある。ひとつは意味または社会を固定し、安定させたいという気持ちであり、もうひとつは意味または社会を流動させたいという気持ちである、という<sup>9</sup>。

結果を過程へと従属させる逸脱経験は当人を彷徨させ、規範を解体させる危険性をもつが、他方、経験の結果への過程の従属は経験を単なる結果の确实性の確認作業になり、他者との関わりを自己の目的の手段と化し、経験の発端である異質性を抹消する危険性も備えているといえよう。人間形成・文化形成としての経験について考えるならば、その二つの側面を同時に考えなければならないということは、モラン (Morin, Edgar) による人間学研究のなかで明確に示される。

ヒューマニズムが人間を理性のヒト (*Homo sapiens*) と称して、その卓抜性を謳って、文明創造の契機をその理性によるものだとしたのに対して、モランは、それらの社会的・文化的な構築物の根源には、人間特有の理性の働きによってのみ成立つのではないという。「人間的秩序は無秩序を含むのだ」<sup>10</sup>と述べ、人間が宿す二つの性質を指摘する。理性のヒトとして安定・充足状況を目指す一方、錯乱のヒト (*Homo demens*) として安定・充足状況との対極にある過剰性 (*ubris*<sup>11</sup>) に生きる。

但し、理性と錯乱は、筆者による経験の二つの要素と同様、一方での崇高な理性の領域と他方で野蛮な錯乱の領域としてきっぱりと別れることなく、常に併存している。過剰性の要素を強くもつのは例えば、遊び、芸術、祭事などがある。つまり、その外部に目的 (有用性) をもたず、それ自体の遂行を目的とした諸行為である。また、人間におけるそれら二つの性質の不可分性について、モランによれば、理性 (*logos*) は確かに、その錯乱によって沈められることもあり得るが、そうした錯乱がなければ、理性は水のない水車に過ぎない<sup>12</sup>。それは秩序どころか騒動や濫費を産出するが、社会生活において、そのような出来事が果たす重要な役割は先行研究で既に示された<sup>13</sup>。

モランがその論述を通じて、西洋思想の根底に潜む人間理性についての本質論を問い直すことにまではならなかったかもしれない。しかし、評価できることは少なくとも、人間の諸傾向・諸行為において「複中心性」(*polycentrisme*) を見出すことによって、軽視されてきたものに注目し、それと人間の営みとの関わりを指摘したことである。

## II. 経験の「過程」の消滅：現代的経験の生き方

以上の論述を通じて、一個人の経験の次元のみならず、社会的存在としての人間の次元においても、経験を多元的な現象として捉えることの重要性を指摘した。次に、現代の社会的状況に視点を

移すことにする。現代では、経験をめぐるふたつの現象が相反して起こるように思う。問題提起のところで述べたように、教育問題としての「経験の欠乏」が指摘される遙か以前の問題として、社会における経験への視点とその産物である「体験の提供」が氾濫している事実がある。経験の欠乏と経験の氾濫という錯綜した状態を如何に捉えることができるかというのは本章の課題である。現代の社会状況における経験の捉え方を検討した上で、教育問題としての「経験の欠乏」はその文脈のなかでどのような位置づけができるかを追究していく。もしかすると、それは経験世界の一部喪失ではなく、「経験」それ自体を捉える社会的観念の転回であるかもしれない。その可能性を検討するために、経験の宝庫としてかつて言及された「旅」を例に、以下に社会的観念としての経験の変容を探りたい。

### 1) 現代における経験の捉え方

現代における経験の捉え方について論じるために、具体例として、旅を取り上げる。なぜなら、旅をどのように捉えるかによって、経験に対する構えも窺うことができると考えるからである。初めに、旅について論じようとする理由は次のようなものである。

第一に、旅と経験とは語源的に共通性をもったものである。旅の歴史学者リード (Leed, Eric J.) は旅と経験の印欧言語における語源の共通性を指摘し、共通の語根 *per* は「経験する」と「外に出る」の二つの意味をもつという。例えば、経験を意味するドイツ語の *Erfahrung* は古代高地ドイツ語の *irfaran* (「旅する」、「さまよう」) に由来することが挙げられよう<sup>14</sup>。

第二に、旅には経験の二つの要素である過程と結果が備わっており、その関連性においても経験と同様である。旅の帰りはひとつの帰結(結果)であるが、それとは別に、旅の過程で、目的地への到達という結果に依存しない出来事がある。

ブーアスティン (Boorstin, Daniel J.)<sup>15</sup>は優れた旅の文化論のなかで、旅の経験に言及する。例えば、18世紀後半の英国の若い貴族が成長と放蕩のために外国へ大旅行をする慣例に触れる。青年たちは旅行によってずっと成長して帰ってくるが、その反面、その習慣は青年たちを墮落させる危険性を含んでいるとも当時非難されたという<sup>16</sup>。

即ち、旅を通じて、青年たちはたくましくなり、賢くなるだけではなく、自分の故郷や日常の生活環境を離れて、その外部にある広い世界の異質性(他者や見知らぬ状況との出遭い)に触れていく。それは決して当時の社会的・歴史的な文脈に特有のものではなく、現代社会にも当てはまることである。現代社会ではそれが捉えにくくなっただけである。様々な危機を乗り越える技量や能力が確かに身につくのだが、同時に、異国の地で、今まで唯一知っていた社会規範や意味秩序とは別のものに出遭い、それとの関わりのなかで、新しい対応を学んでいく。そして、従来の社会規範などを反省するきっかけでもある。その結果、旅から帰還して得られたものは、成長の要素と見なされるもの(異質性を克服する能力や技量など)もあれば、もともと所属していた社会規範から見ると成長どころか墮落(異質性と関係し、自己変容する能力、つまり、規定の秩序を逸脱する能力)と見なされる要素も混在している。双方の能力は旅の過程のなかで獲得されたもので、一方を欠いて

は他方は得られない不可分な全体である。よって旅と経験との共通点をもうひとつ加えて挙げるならば、両方は異質性との関係の過程であるといえよう。既述したように、旅には経験と同様の「過程」と「結果」という二つの要素がある。そして、その過程を通じて遭遇した様々な出来事はその結果に影響を及ぼす。旅の進行を阻むものだけが出来事ではない、他者との出遭いや途中で見た、聞いた、感じたことも出来事の一例である。その全ては「経験」の一部分である。旅の可能性や結果の一部は旅の過程において決定される。従って、旅の経験の結果はその過程に従属するといえよう。どんなに確定した目的地が前もって設定されようとも、そこまでの過程を通過せずして、到達できるものはない。目的地への到達と同じ位、旅の途中での出来事は旅の経験を形成するのだが、しかし、それらの障害、問題、または出遭いは到達を遅延し、路に迷わせ、路を失わせる危険性を孕む。要するに、時間と根気が必要になってくるのである。

ところが、交通手段の高速化と交通網の整備の凄まじい発展によって、今日に至って、旅行の過程を阻むものは最低限に抑えられるようになった。現代では、誰もが以前より頻繁に旅行をしている。それは交通の技術の発展に起因するだけではなく、それに伴った我々の生活範囲の拡大と生活それ自体の効率化、合理化、加速化の現れでもある。プーアスティンはそのような旅行の変容に伴い、旅の経験は「希薄化され、あらかじめ作りあげたものになってしまった」<sup>17</sup>という。その見解から、旅の経験が如何に希薄化してきたことを、そして如何に旅行をすることが別様の経験に変容してきたことを見ることによって、現代の「経験の欠乏」の根本問題を捉えるための示唆が得られると考え、以下にその論点を展開していきたい。

今日、旅行をすることはどのようなときか。必要や業務に駆られて旅をするのが、以前の行商や飛脚と変わらない事態であり、さらに、それをより速く、より安全にできることは現代の旅行の功績である。しかし、人々が旅行をするきっかけは自分の務めを果たすために限らない。旅行者の増加のもうひとつの側面は名所、絶景、遺跡、風情のある地域祭事、「エキゾチックな」南国の島を期待して、観光・娯楽目的で訪れることでもある。その一面においてこそ「希薄化」としての旅の経験変容を見出すことができる。なぜなら、いわずとしれたそれぞれの場所の異質性が、そこへの旅の過程を通じて、目的地でも発見されることはないからである。そもそも、旅人ならぬ今日の旅客たちはそれらの場所の異質性（遺跡などの時間的な異質性、異国や地方の文化的な異質性、山や森の自然としての異質性）に出遭う可能性は少ないだろう。その根拠を以下の詳述によって明らかにしよう。

#### ① 過程の消滅

旅行するときの殆どの場合、まず、出発点から自動車、バス、列車、飛行機などに乗って、移動する。数時間を越えることが稀でしかない間に、旅客は到着を待っているだけで、旅の過程と隔離されており、直接に関わらない。換言すれば「目的地へ行く途中の経験は消されてしまった」<sup>18</sup>ということである。その隔離の極致はいうまでもなく飛行機である。飛行に際して、「空間ではなく、時間を飛行したにすぎなかった」<sup>19</sup>という記述も、現代特有の「時間における空間の消滅」(annihilation of space through time)<sup>20</sup>を明確に体現すると思われる。その過程の省略は旅の経験を形



成する異質性との関わりをも縮減すると同時に、目当ての光景や場所までに素早く、確実に、手段的に、計画的な行程の円滑的な進行を可能にする。出発点と到達点の間、何も起こらなかったことに等しい。そしてそれは長距離旅行に限らず、国内での自然公園や絶景への旅行は同じ構造をもっている。今日、名山の頂を日帰り、駐車場とお土産売店が付いて、「攻略」できるようになったのだ。面倒なものや苦勞、それに必要な時間の殆どはその過程において費やされるが、それを誰かが代わりにその責任を負ってくれば、旅客はそのサービスを利用したいものであることも安易に理解できる。旅における過程の消滅、別の視点からいえば、旅客による過程の放棄もしくは委託に伴い、後述するようにサービス業としての旅行業界が画期的な発展を遂げたのである。旅行することの普及とそれに要する時間の短縮、今日の効率のよさと快適さを可能にした諸要因は旅の改善として捉えられると同時に、旅の経験の希薄化を招くという代償をも背負っている。

## ② 異質性の回避

さらに、「旅行者はいろいろな土地に住んでいる人々に出会うために世界を周遊した。しかし、今日の旅行代理店の機能のひとつは、そのような出会いをさまたげることにある」<sup>21</sup>ことから、異質性との関わりは単に減少しただけではなく、積極的に回避されたということである。過程の消滅は既に一種の回避であるが、目的地についてもなお、異質性は回避される。快適で安全な旅に加えて、目的地に着いて、完備のホテルに泊まり、その土地特有の文化的行事や産物を堪能することはすべて提供元の代理店によって保証される。しかし「本当に保証することができるものは、自然発生的な文化の産物ではなく、観光客用に […] 作られた産物」<sup>22</sup>であることも忘れてはならない。結局のところ、そのような旅の「経験」には前もって計画されたものしか入る余地がない。

## ③ 標準化の徹底

今日の旅の殆どは国内外を問わず、必ず同じサービスで、同じ快適さで、骨折りのないように標準化され、同質化された滞在環境を誰がいても「経験」できるのでなければならない。なぜかという、利用者全員に対して、そして全員に代わって、提供者がその責任を負っているからである。さらに、重要なことは、その旅の「経験」は旅客自身ではない他人によって決定されていることである。旅客はその他人<sup>23</sup>が提供するサービス内容を選択し、そこに至るまでの過程を委託するだけである。起きて欲しいことしか起こらないように、観たいものが観られるように、触れたい「異文化」に触れるように、そして「経験」したいものを「経験」できるように委託するのである<sup>24</sup>。勿論、その期待に応えるように、旅の経験の提供をする業者は一層、目指すべき「予定された旅内容」そっくりのものを毎回、再生産するために尽力するのである。

以上に述べた経験の希薄化の過程を通じて、旅の経験をどのように捉えられているかを窺うこともできたように思われる。「経験提供」が出現し、加速的に増殖してきたことが経験の希薄化に並行したこと確認できた。次節で、そのことをもっと広範に扱う前に、経験に対して、そのような把握のうちに潜む諸前提を以下に整理しよう。

第一に、既述した経験の過程の消滅は本人にとっての消滅である。過程を通過せずして結果に到

達するはできないゆえに、過程を完全に消滅させることができない。ここではむしろ過程の処理を委託することが前提となる。筆者が主張した経験の過程と結果による構図からすれば、専ら結果の要素のみを残した経験の出現を意味する。しかし、過程を当人から分離することは当人と異質なものととの関わりを分離するだけではなく、その過程を通じての責任（様々な行為や判断に伴う責任）の殆どを企画者に転移するのである。

第二に、旅から異質性を排除し、その異質性と能動的に関わる旅の過程を消滅／放棄してから、確かに快適で楽しい休日は過ごせるかもしれないが、決して何らかの経験ができることはないだろう。つまり旅客は自分の旅の受動的な消費者に過ぎない。その経験も、自らの行動や判断や責任で、自らの努力で能動的に貫いていくものではなく、誰かから保証付きで経験が提供されるものである。もはや、旅の「経験的価値」は専ら「結果」にしか求められていない。さらに、「結果」とは当人が自分で確かめて得られた「結果」ではなく、むしろ、最初から決まっていた同質な「結果」である。

最後に、一言でいえば、その類の経験は当人にとって、通常の意味で「経験される」ものではないことを最も重要な特徴とする。経験というものは過去形で言及されるものである。誰かが、何かを経験した、と我々はいふ。経験したことや状況が過去となり、そのことについて反省したり、回想したり、それから新しい知識を蓄えたり、新しい感情を覚えたり、他人に語ったりするものである。冒頭で言及した経験はそのような構図に当てはまる。経験知または方法知の獲得は経験の過程の通過、問題状況における解決の試みの実践を必要とする。また逸脱経験は異質なものととの出遭いとそれとの関係の過程を必要とする。それらの経験は過程を通過して結果に至るような経験である。ところが、提供される経験はそのような構図には従っていない。それは経験したものの語りではなく、それから経験していくものの語りである。要するに過程を欠いた結果としての経験の語りは経験それ自体に先行して、「されるであろう経験」の表象になってしまう。ブーアスティンはそれを「反応の記録」と呼ぶ。なぜなら、旅行案内書は個々人に新しい知識をもたらすことはない、むしろ個々人が既にその表象を通じて知っているものに対して反応を出発前に既に語られたものようであるからだ。提供されるものは反省や理解の材料ではなく、事前での当人の反応である。その結果、我々は（経験を通じて把握した）現実によって表象（その経験の語り）を確かめるのではなく、表象によって現実を確かめるのだ<sup>25</sup>。

そのような提供された経験の類を筆者は「提供物」と呼ぶ。提供物とは過程を欠いた、実態のない表象だけの経験で、専らの提供者が専らの利用者に提供する同質化した「みんなの経験であると同時に誰の経験でもないような経験」である。その最たる特徴として、経験の結果が当人による経験自体に先行するということである。そのような提供物は旅の経験に限ることなく、特にこの数十年における第三次産業の発展に伴って威勢を増して、現代社会に蔓延る「経験」の新たな形になりつつあると思われる。次節では、その提供物の出現によって現代の生活における経験の位置づけをより広範に考察していきたい。

## 2) 「提供物」としての新たな経験

旅の例を通じて、経験の希薄化について述べてきたが、別の視点からすれば、旅行業界が一大企業に成長し、逆に経験を多様なものにしたともいえる。1964年に邦訳で出版された『幻影の時代』はその前兆について記述したが、そのような「経験の提供」が社会の多くの領域に浸透していくことは後年において確固たる事実となった。今日では、「経験への視点」が活発に促進され、展開しつつあると見受けられる。習い事教室やスポーツジム施設の体験入会から、美容関連サービス業による「癒し体験」の約束を経て、語学研修ツアーの取り扱う「異文化体験」や某遊園地の提供する「叫びたくなるほどの感動の体験」や「驚きの体験」(sic) までである。まさに身近な製品や施設が突然、体験へと誘うものや場所になったかのようである。その文脈で経験を捉えてみると、特定の場所に過ごす時間、特定の活動の遂行、特定のモノの利用、要するに経験の過程を特定の「活動」へと回収するによって、経験を均一化して、経験内容を実現することができるという論理になっている。

例えば、「感動的な」イベントはそれに立ち会うこと自体に既に感動の経験が必然的に誰にでも同質的に得られることを前提に企画される。それは即ち、経験結果が経験自体に先行する提供物の一種である。そのような「経験への視点」はここ数十年での第三次産業（サービス業）の肥大なほどの発展とともに現れたと筆者は考える。矢野によれば「この四〇年の間に、日本の国民総生産は一九五〇年の約一二〇倍となり、七〇年代を境に、第三次産業の就職者は労働者全体の半数以上に達し、また国民総生産に占める割合も五〇%を超えた。人口の大部分は、商品と情報が高密度に集積する都市の生活者となった」<sup>26</sup>。さて、そのような事態を問題視することはどのようなことか。誰もがホテルの清掃係員、旅行のガイドなど、第三次産業に勤める従業員の職務上の態度に対して疑念を抱くことはない。彼らは我々の生活の充実の面からして、ありがたい存在である。否、従業員の職務内容が問題ではない。問題なのはむしろ、それでもって提供される（はず）のサービスである。

サービス提供があまりにも肥大化したゆえに、そもそも提供できないものも提供の対象となった。職務を通じて、快適さや清潔さは提供できるものではあるが、同じ同質化したサービスとして「感動」または「楽しさ」を提供できるか。筆者はそれを何より疑わしく思う。以下の考察で重要な問題となるのは提供行為と提供内容との間の相違である。提供者による提供行為は常に具体的で、一定の活動を指すものであるのに対して提供されたであろう提供内容はときとして抽象的で、不確実でありうるということである。

計画・予測された効果を当人が必ず「経験する」ことの保証はどこにもない。その効果を感じない人への対応（またはその解釈）という問題は未解答のままである。確かなことは、その人を異常者として片付けることができないということだろう。特に多種多様な趣向をもっている人々がいる現代において、各自はある環境のなかで、ある活動を通じて、感動や楽しさや驚きなどを経験し、感じることは確かである。しかし、それは必ず、同じ場所や同じ活動ではなく、それぞれ個人差があるのは当然だと考えられる<sup>27</sup>。

だが、提供物は経験過程を当人から分離するので、個々人の経験の特異性を遮断し、そのような多様な当人に依存せず展開・普及することができる。それは世界に対する経験知や方法知（世界了解）をもたらすものでもなければ、異質的なものとの創造的な関係でもない<sup>28</sup>。それは経験の別様の現れ：消費対象、商品としての経験である。

リフキン（Rifkin, Jeremy）によれば、現代人の経済的活動は徐々にモノ（物的財産）の売買から遠ざかっている。それは「アクセス」という取引法に取って代わりつつあるという。「アクセス」とは製品を買ってその所有者になるのではなく、提供元から利用権を買って、一時的に利用するという意味である。それに、「アクセス」は物的な便宜を越えて、ますます抽象的なものの提供に至る。その過程を以下のように捉える。

「我々は「工業生産」から「文化生産」への移行という長期的な変化のさなかにある。その先、時代の最先端を行くような商取引では、従来の工業製品やサービスのマーケティングだけではなく、ありとあらゆる種類の「文化経験」のマーケティングが行われる機会が増えていくだろう。海外旅行、観光、テーマシティーやテーマパーク、目的地型エンターテインメントセンター、健康、ファッション、料理、スポーツ観戦、ギャンブル、音楽、映画、テレビ、サイバー空間内のバーチャルワールド、コンピューターを用いた各種娯楽等々。[...]時代は経済学者が「経験経済」と呼ぶものへ、すなわち我々個々人の人生が事実上商行為の対象である「市場」と化す世界へと移りつつある」<sup>29</sup>。

そのような「経験経済」の仕組みを分析した文献のなか、パイン（Pine, B. J.）とギルモア（Gilmore, J.H.）の *The Experience Economy*（1999年）が挙げられる。著者曰く、経済進歩の歴史とは本来無料で得られるものに対して、料金を請求する過程である。長年なされたように、新しいものや不思議なものを我々自身によって経験することに頼るより、成熟した経験経済のもとでは、ますます経験を演出してもらうために、企業に金を払うだろう。ちょうど我々が以前自分たちで為していたサービスや作っていた製品に対して、今となって企業に提供してもらうために金を払っていると同時に、経験業界（experience business）の利用者になっている<sup>30</sup>。

また、著者によれば経験業界は従来のサービス業界とは以下の点において異なることを指摘する。サービス業界は従業員の活動内容に対して代金を請求する。提供されるものが操作（operation）であり、無形（intangible）である。他方、経験業界は（企画、イベント、施設内での）客が過ごす時間に対して代金を請求する。提供されるものがイベント（event）であり、思い出に値する（memorable）ものである<sup>31</sup>、という相違があるとされている。

その解釈や区分に対して、賛同するかどうかは別として、現在の我々の生活に「経験業界」らしきもの浸透という事実だけは認められるのであろう。

経済の分野からのその解釈は、本論での経験の解釈枠組みからみてどのような経験であるか。それもまた、今まで列挙したもののなかでの最も高度で、精密な提供物である。加えて、空間的に時間的に非常に厳密に規定される消費活動である。提供物の利用者がそのように統制された環境での計画された一連の出来事の確実な受容者、もしくは享受者でありたいことは、まさに経験の過程の

消滅／放棄の最も根源的な理由のひとつである。そもそも、過程を通過せずして結果に至らないという経験の構造が時間的制約とは無縁である。しかし、提供物の浸透が著しいところ、例えば娯楽業界では、その時間的な性質は明らかである<sup>32</sup>。現代人は時間に追われて、時間を節約したくて、最大の効果を最短の時間で達成できることを追求する。提供物はまさに彼らの望みを叶えてくれる。経験の過程にかかる時間、遭遇する危険や不安は当人に代わって提供者が統制する。経験の過程につきまとう個々人の反応の差、態度の差も均一化して提供する。そして経験の結果も、責任も、経験に含まれる社会秩序を脅かす危険性も全部取り払って、快適で、安全で、清潔で、健全で、効率のよい、一定時間内でできる経験に替えて、「利用者」に与えるのである。よって、現代人は経験にかかる時間と晒される危険、そして異質性を含む諸々の不確実な要因を忌避しようとして、経験の過程を消滅／放棄したと結論できよう。

しかし、そうすることによって、経験の最たる源泉を同時に消失させてしまったのではないか。経験の発端を未知なる状況や異質なものと当人との関わりにおいて見出すならば、「当人」と「異質性」をその関係図式から除けば、関係するものは皆無である。当人は経験の過程で、異質性との関係を通じて様々な行為や決断をするものであり、その責任を負うものである。また、経験の結果としての経験の物語、または表象の創造者であり、語りがたい出来事の記憶の保持者である。他方、異質性は当人の経験を可能にする不可欠な存在である。加えて、秩序からの逸脱可能性としての「危険性」であり、結果の不確実性が孕む「危険性」でもある。当人のそれとの能動的な関係を経験から除くと、経験の創造性は単なる受動的な訓練の反復になってしまう。そして、唯一残された決断はおそらく、提供物の氾濫のなかで、今日どんな経験がしたいかという選択だけである。

さて、今までの議論を通じて、現代的な経験の捉え方に触れた。総じていえば、当人にとっての経験の過程が省略されていること、そしてその省略によって生じる問題性を示してきた。現状は複雑で、経験の氾濫のなかで、経験の希薄化が同時に生じているということが見受けられる。その問題の重要な主役は経験する当人である。当人の視点から経験を捉え直すことは、いまや必要であろう。しかし、その考察をする前に、本章で論じてきた今日における経験の文脈に、教育界から指摘される「経験の欠乏」をどのように位置づけるかを考え、その主張の根本問題を以下に検討し、明らかにしていきたい。

### 3) 教育における「経験の欠乏」の主張の根本問題

経験の欠乏が主張されるわけは個々人が経験する事象の多様性が減少したからではない。我々は日々、激変する社会の姿を目の当たりにし、情報や映像の氾濫の中に生きている。個人の経験世界はそれらの事象で充溢しているほどである。否むしろ、地域社会の絆が希薄化し、産業化や都市化の進展に伴い、子どもの遊びと自然との触れ合いが危機に立たされていると懸念し、経験の欠乏を訴える言説<sup>33</sup>は共通経験の希薄化を主張するものとして理解できるだろう。あらゆる社会では、その社会の人々はその社会的・文化的な環境で生まれ、育った以上、必ず経験するものがある。それ

## 「経験欠乏の現代」の根本問題

を通じて、社会での共通の観念や行動様式を獲得して、社会の一員として当人は形成されていく。従って、そのような経験に人間形成的な役割をもって、円滑な共同生活を営むために重要である。さらに、そのような人間形成上重要な関わりをもつ経験の機会が薄れると、当然そのいわば文化形成力も弱まるであろう。そして、共同生活がその安定を失い、孤独や暴力や様々な社会問題が蔓延るようになる。そのような経験の機会は人間関係が希薄となった今日において、欠乏することになったことで、教育界が「経験への視点」を中心とした大規模な措置を近年、実施するようになった。その発端は平成10年6月30日の中教審の答申（注33を参照）であると考え、それを期に、経験の欠乏に対応するための対策として、体験活動プログラムの提供が呼びかけられた。

しかし、以上の議論で明らかになったように、「経験への視点」とは教育界だけが見出した視点ではない。ずっと以前から、他の多くの領域において見出された。よって、別の目的で別の関心のもとであろうとも、「経験への視点」を通じて大規模な措置を稼働させた教育対策としての「体験提供」を現代社会に普及した「体験提供」との関係や相違を明らかにしなければなるまい。なぜなら、その教育対策としての効果を発揮するために、「体験提供」がもうひとつの提供物になるおそれがないかを注意深く検討する必要があるからである。次のような点において、両者の間に明確な相違が認められる。最初に、提供物は消費社会の欲望から生まれた商品（正確には商品の表象）であり、過剰に生産され、提供者の営利を最終目的として企画されたイベントである。それに対して、教育において、実状の経験の欠乏に応じるために「体験提供」の対策に踏み込んだ。また、提供物は如何なる新しい知識ももたらさないに対して、欠乏状態に陥った諸々の経験を提供することによって、その人間形成的効果でもって、今日の不安定な教育状況を克服しようとしているのは教育における「体験提供」の狙いである。

ここ数十年の社会の変貌を知っている人、もしくはその変貌のなかに育った人なら、今日になって頻繁に指摘される以下のことにおそらく同意するであろう。地域社会の絆や人間関係が希薄化し、都市化の進展に伴い、子どもの遊びの形態が変容し、自然との触れ合いの機会が減少した、ということである。筆者も、その状況を真剣に受け止める。かつての地域社会や親密な人間関係が織り成す教育的要素やその経験から様々なこと学んだことも認める。従って、それらの経験的状況が現代社会の生活から姿を殆ど消したことによって、それぞれの経験を通じてもたらされた人間形成的効果が同時に欠乏してきたという指摘は正論であり、中教審の答申を初めとする諸々の教育（学）的議論の「経験の欠乏」に対する問題意識を筆者は共有する。

ところが、経験の希薄化を訴えることはなるほど正論であるが、それによって失われた文化・人間形成の要素という「結果」のみを嘆き、その形成の契機となった「過程」を全く考慮せず、その経験を一定の環境条件下における一連の活動によって導かれた結果としてのみ捉える限りでは、問題の核心に触れることはないだろう。経験の希薄化に対する問題意識が正論であっても、その問題に対応するための方策の解釈によって、「体験の提供」という方策には実に恐ろしい歪曲の可能性がある。そしてそれはもとの提案者が統制できる範囲を遥かに越えており、提供者である実践団体の手に委ねられ、修正の効かない軌道に乗せる可能性を潜めている。その論点をより詳しく展開し

よう。

経験が問題視される今、その所謂「欠乏」を被るのはまず、社会でも、提供者でもなく、他ならぬ（経験する、もしくは経験できなくなった）本人のはずである。先ほど言及した経験の欠乏を招いた様々な社会的要因の過程を生き、知っている者は、その状況を懸念し、警戒することはできても、そのような過程を知らない、もしくはそれに対して警戒心をもたない者に、その事態の重要性は認識されていないだろう。加えて、かつての豊かな人間形成を育んだとされる環境条件に再びおかれて、経験的に実り多いとされる活動への参加を促されても、かつてもたらされたような結果を得るとは限らない。提供物としての経験が蔓延する社会に生まれ、育てられた者がそれを全く別様に受け止める可能性はむしろ高い。本人の視点は今までの議論には欠けており、その経験を貫く本人の立場をも大切に議論のために、経験を「結果」という一般化可能な表象の視点からよりも、むしろ経験における本人と世界との関係の「過程」の視点から検討するのが不可欠であると考え。

ある活動を通じて、実り多い経験を共にした一団の人々がいたとしても、その豊富な経験の源泉はその活動への参加にあると結論づけることはできない。また、その活動に参加することによって、それに該当するかのようなあらかじめ決まった結果を得るとは限らない。キャンプから特定の「キャンプ体験」は出てこないし、登山から特定の「登山体験」も生じない。それらの経験を特定の活動に起因させるような捉え方は「共通経験」というものの「共通性」を誤解することになる。また、開いた経験の世界を逆に喪失させることになってしまう。参考に具体例を取り上げると、経験の欠乏の現状が中教審の答申において、次のように報告される。今日の子どもたちは驚きや感動の体験が乏しくなっている。遊び場も減少しており、なお自然のなかでの遊びの機会が失われている。自然の中での遊びから、多くを学ぶ。例えば驚きや感動を体験し、人間を超えたものへの畏敬の気持ちが育まれる機会である、という。その事態に対応すべく、冒険活動のできる遊び場の設置や自然体験活動の提供を提案し、その実施を奨励する、とある<sup>34</sup>。すべての経験は特定の「活動」に回収され、それによって、目当ての感動や驚きをその活動の因果的な結果として得られることが想定される。「体験活動」たる計画的提供は、経験において重要な異質性との関わりに目的を付与することで、本人はその一方的な受け手になり、経験はもはや何かの目的を達成するための手段になってしまう。それで、経験はその根源的な異質性を失い、誰もが辿り着くだろう均一な経験内容に変わる。その意味では、観光業者が組む「体験旅行」に酷似する。経験は旅に先行し、内容が予め確定された（感動、驚き、畏敬の）経験をするための旅行となる。

要するに、今日では、余りにも与えられ、内容を確定され、約束される現代の経験は本人にとって過程として生きられたのではなく、表象（結果）として見せられるのだ。しかし、そのような表象としての経験の批判を経験における表象化に対する批判と解してはならない。なぜなら、ここで問題となるのは「体験提供」において、経験の表象が出来事との関わり過程に先行することであり、表象それ自体を排斥すべきもの、もしくは余計なものとして捉えるつもりは毛頭ないからである。表象は経験の物語として、経験の一部である。しかしその表象は、経験の過程を経てできたものであり、本人によって創られるものである。よって、以前可能だった経験が日常から消えたこ

とに対応できるため、教育対策はそのような経験表象の先行問題を乗り越えなければならないと思われる。

経験の欠乏が問題視される以上、その発達や成長への弊害を克服することを望むならば、以下二点を考慮に入れることが必要であろう。

第一に、「提供者」の視点からどのように経験を「与えればいいのか」という効率の問題として考えるのを脱却しなければならない。けれども、その提供それ自体を止めるべきだという意味ではない。そもそも、提供と経験との間には必然的な結びつきがないゆえに、提供されなければ経験が「本来の厚み」を取り戻せないというわけではない。当人はその問題をどう受け止め、対応するか。そして当人にとってそもそも問題であるかということを検討する必要がある。問題提起の際に述べたように、当人にとっての経験を考慮に入れなければ、経験は単なる表象化に留まるに過ぎない。そして結局、「体験提供」は別種の提供物になる可能性は否めない。

第二に、経験の過程の処理を当人に委ねることである。経験を通じて学ぶということの促進とは言い換えれば、普遍的な真理の他的な伝授を斥け、経験を通じての当人の歩みを重視し、信じることである。ところが、本稿を通じて明らかにしたように、現代の経験の特徴とは経験の過程の消滅／放棄である。経験の過程は提供者から責任をもって統制され、計画されてきた。よって、それを当人に（再び）委ねることが、今まで忌避されてきた経験の不確実性や「危険性」を再び放つことを意味する。しかし、経験を当人と異質な状況との関係において成立するものであると考えるならば、経験から当人の能動的な関わりも、不確実でありながら創造性の根源である異質性も省くことはできない。

教育の文脈での「体験提供」がその機能を果たすために必要なのは統制された環境に当人をおき、計画的な活動を指導することではない。そのことは充分と現代の都市生活のなかでなされている。必要なのは、「経験の場」との接触の機会である。その果てに提供された「結果」がない機会、そして当人が自分で「自分の結果」を見つけ出すような機会である。また、必要なのは、当人がその場のなかで、自分なりに関係を成立させ、経験の過程を自ら進み、自ら経験の表象の創造者になることである。そしてそれとともに、その結果としての可能性も、切望も、不確実性も、逸脱をも受け止めることである。だが、当人がそれを受け止める可能性が生まれるために、まず初めに、機会だけを提供して、結果を当人に委ねて提供者がそれを受け止めなければならない<sup>35</sup>。

経験の過程を生きる当人の視点は本稿の「経験欠乏の現代」の根本問題に対する答えである。つまり、経験の欠乏の根底にあるのは経験の過程の消滅に伴う、その過程の欠乏であると考えられる。次章において、当人の視点から経験を考えるためのいくつかの道標を取り上げていく。



### Ⅲ 経験の過程を生きる当人の視点

#### 1) 経験の共通性について

本稿の問題関心としては「提供」を通じての経験の可能性を論じてきたが、経験をする、または共有できる可能性は、特定の活動にはないゆえに、提供者から一方的に与えられないという結論に至った。敢えて経験が提供されるとしても、それは関係の次元を欠いた、規定された表象としての経験に留まることになる。しかし、それで経験を共有する可能性がなくなったことを意味するわけではない。ただ、経験を共有し、経験から豊富な内容を汲み取る営みに、別様の捉え方が必要とされることを意味する。さきほど取り上げた「共通性」の意味を考えると、ここでは、字義通りに「共に通った」という意味で理解したい。即ち、祭りの昂揚を、遊びの楽しさを、自然の神秘を共に感じた人々にとって、それらの出来事において、どこで、どうして感じたかと説明したり、客観的な事実として差し出したり、証明したりすることはない。「共に」というのは「同様に」ではない。それは特定内容の客観的対象として「楽しさ」とか「神秘」とかがあるのではない。よって「楽しさ」や「神秘」を宿すとされる特定活動をするに参加しても、その結果として、当人の前に「楽しさ」などが一目瞭然な実態として現れるのではない。祭りは非日常な騒ぎに共同体を陥れ、遊びは意味了解の歪曲であり、自然は人間にとって、最も異質な他者である。これらの経験は特定の「活動」から生み出された結果において「共通」ではなく、むしろ、異質なものとの出遭いによってもたされた、表象されえない関係の過程を共に通った意味で「共通」であったといえよう。

そのような「過程を共に通った関係」は科学実験のような「誰でもが結果を確認できる」共通の了解ではない。また、その経験の理解を促し、それを通じて「相互理解」を生み出すことはない。ここで、第一章で述べた「逸脱経験」における過程と結果の関係を思い出してもらいたい。意味秩序からの逸脱は結果を経験過程に従属させ、過程を通過することが変容の可能性に開いた結果を生み出す、という趣旨の記述であった。この経験を通じて、結果の確実性を証明する合理的な因果性はない。唯一いえるのはその経験を通じて、何かの変容が当人にとって生じたということであり、如何に生じたかは説明できない。「過程を共に通った」ことによって生じる経験の共通性も、結果的に当人たちに変容をきたすが、それは必ず同じ変容ではない。

それは民俗学でいう「移行」の経験の捉え方に類似すると思われる。少年が成人の世界へと迎え入れられるような通過儀礼はその一例である。社会的制度として儀礼を用いる社会において、通過儀礼は「場所・状態・社会的地位・年齢のあらゆる変化にともなう儀礼」<sup>36</sup>である。少年たちはその過程において、長期に及ぶ隔離、または苛酷な試練を経験する。儀礼とは神秘的なものであり、祖先の霊または超自然的なものが介入すると信じられる。そこで少年たち全員は同一の結果に至ったか、個々人がちゃんと経験すべき特定の事柄を経験したか、その過程と結果の関係を全員が確実に理解したか、ということを確認しようとする者は誰もいない。ここでは因果的に理解するものはないからだ。あるのはただ、変容だけである。ウィルソン (Wilson, Bryan R.) が儀礼に関して「ここでなされていたものは感情移入的に (empathically)、詩的に、神秘的に理解されるものであり、

一群の合理的陳述によって表現できるものではない<sup>37</sup>という。そのことは意味秩序からの逸脱にも当てはまる。但し、筆者が逸脱経験とは儀礼の経験であるというつもりはない。儀礼が社会的な機能を果たす社会とそうでない我々の社会との乖離は充分と認識している。むしろいいたいのは、我々の社会でも、経験がもたらす教えが必ず「一群の合理的陳述」によって表現されるとは限らないということである。経験の共通性を保証するために、合理性のメスを入れれば、今なお残り少ない「神秘性」や「不思議」を生かすどころか、抹殺して擬似物の表象をその代わりに作ってしまうことになる。

## 2) 経験は教育にだけ関わる問題ではない

前述したように、あらゆる経験を生きるのは当人に他ならない。そのような当人の視点は本論にとって重要である。何故なら、問題視される自然や遊びの経験は本来、何らかの生産的・教育的な営みとは無縁だからである。もともと、子どもが自然に触れるときや、遊んでいたときの殆どはそうするように指導や仕向けを社会から受けていたからではない。逆にその権威を逃れて、遊びを通じて自分たちだけの「異世界」を創っていた。さらに、子どもにはずっと前から、遊ぶのに特化した設備や施設を必要としない。これらの経験は共同体のための有用な活動ではなく、放蕩的な余暇の次元<sup>38</sup>に属していたが、それを生産的な「活動」へと還元されてきた。旅をすること、自然に触れあうこと、遊ぶこと、それぞれには確かな教育効果があるが、忘れてはならないのは、それらのことは教育的な営みとしてなされたものではない。さらにいえばそれらのことは意図的な教育的な働きの外部に繰り広げられた。誰もが環境を整え、活動を計画し、提供する者はいなかった。当人たちも、それらの活動を通じて、特に自分の成長を配慮して臨んでいたわけではなかった。今では、その「教育の外にある教育効果」を惜しんで、教育の内に、もしくは活動提供を通じてもたらそうとすることは困難である。そしてその困難のひとつの理由を本稿で提示してきた。経験とは単に教育的な営みだけに関わる事柄ではなく、我々が生きる空間と時間そのものにも関わる。そして特に、自己表現、相互理解、コミュニケーション能力を称揚する時代において、異質なものを、つまり共約不可能なもの、我々の規範や意味理解を逸脱するものとも関わる。表象の上の理解や表象の上の交流は、もともとそこに入れられたものしかもたらさない。異質性との出遭いは理解も調和も発展も約束しない。諸刃の剣のような関係を通じて、限りなく広い「世界」での当人の自己生成への入り口に過ぎない。

## IV—結語

本稿を通じて、現代における経験の捉え方を検討し、その現状の複雑さに触れ、その根本問題を探ろうとした。経験は失われたのではない。逆に、経験をひとつの確固たる結果をもたらすものとしてのみ見なすことによって、対象化したあまり、その活性力が衰えただけである。経験による意味秩序への異質性の回収を通じて、世界を捉えるための科学、共同体の維持のための規範はある共通の世界理解をもたらし、人間形成や文化形成を可能にしたが、同時にその暴走によって、提供物

をも生み出した。提供物は異質性を回避し、過程抜きの結果を作ることによって、経験を空洞なものにし、単なる欲望の消費の対象にしてしまった。

経験の欠乏の根本問題をそのような「過程」の欠乏として捉えた。さらに、意味秩序に回収できないものとしての異質性との関係を通じて、別の人間形成の可能性、変容の可能性や創造性への可能性を指摘した。その可能性は現在、大きく阻まれているように思う。経験を考えることは「如何に異質性（つまり問題）を解消し、意味秩序において回収し、理解するのか」だけではなく、「如何に異質性（つまり他なるもの）を受け止め、対応し、新しい関係を創造するか」であることを本稿において論じてきた。その提唱が現代の経験を捉えるための示唆になり得たならば、何より幸いに思う。

前述のモランの論を思い出せば、警告としてみることもできる。秩序は無秩序を含んでおり、理性は錯乱を含んでいると彼は述べた。秩序それ自体にもある種の過剰性がある。それは次のようなブレトン（Breton, Philippe）の言葉によく表される。コミュニケーションの要素が強い社会はその反面、（他者との）であいの要素が弱い社会である<sup>39</sup>、という。透明性を求めるあまり、我々は周りが見えなくなる危険性がある、とでもいえるだろう。

### 〈注〉

- (1) 「経験」と「体験」を区別し、異なる概念として扱うような立場をとる論者がいるのだが、本稿では、その二つの表現を意味上、区別をしない。以後、「体験」という表現の使用はあくまでも、それが言及される一般的な言説や文脈がそのような表現を採用したためであり、筆者が意図的にそれを「経験」と区別したいためではない。
- (2) 拙稿『『逸脱経験』をめぐって—経験における『世界との関係』の射程—』『教育基礎学研究』創刊号、2003年、4頁を参照。
- (3) 本稿では、「逸脱」という用語はあくまで意味秩序や合理的体系からの逸脱の意味で使用し、「逸脱行為」でいうような非行の文脈とは関係がないことに留意されたい。
- (4) 廣松渉 他編『岩波哲学・思想辞典』、岩波書店、1998年、401頁。
- (5) 「出遭い」と記するのも、異質なものの出現の偶発性や遭遇的な性格を表すためである。
- (6) 経験における関係性の捉え方とその意義について、拙稿『『逸脱経験』をめぐって—経験における『世界との関係』の射程—』『教育基礎学研究』創刊号 2003年 3～18頁を参照されたい。
- (7) 但し、そのような創造性は経験の「可能性として」あるのであって、経験に本質的に備わっているのではない。経験の果てに、何も約束されてはいないし、必然的に「創造性」に至るわけでもない。
- (8) 経験のそのような側面を積極的に論じた文献には矢野智司の『自己変容の物語—生成・贈与・教育』（金子書房 2000年）がある。発達を重視する教育とは異なった原理に従う異質性との

関わりを「生成としての教育」と呼んで、その重要性を指摘した。

- (9) 瀬戸賢一『レトリックの知』、新曜社、1988年、120頁を参照。
- (10) モラン『失われた範例：人間の自然性』吉田幸男訳、法政大学出版局、1975年、146頁（原文 p. 126）。
- (11) 「hubris」とも表記する。ギリシャ語の ὑβρις からの直接借用、もともと「神々に対する僭越」の意。概して、秩序・正義（díkē）を侵犯する「過剰性」またはその性格をもった者のことを指す。ubris は規範を超えており、創造と破壊という両面的な性格をもつ。
- (12) 前掲書、原文 p. 133、邦訳156頁を参照。訳を一部改めた。
- (13) 例えば、ホイジンガ（Huizinga, Johan）、『ホモ・ルーデンス』高橋英夫訳、中公文庫、1973年。ターナー（Turner, Victor）、『儀礼の過程』富倉光雄訳、思索社、1976年、など。
- (14) リード『旅の思想史—ギルガメシュ叙事詩から世界観光旅行へ』伊藤誓訳、法政大学出版局、1993年、7頁を参照。
- (15) ブーアスティン、『幻影の時代』星野郁美・後藤和彦訳、東京創元社、1964年。特に第三章「旅行者から観光客へ—失われた旅行術」を参照した。
- (16) 前掲書、93～94頁。なお、前に触れたように、成長を目的の誠実な実現に起因させ、墮落をその路からの逸脱と解してはならない。経験の二元論ではない。それら諸々の効果は同じ経験のなかにあり、経験の過程を通じて導かれたものである。
- (17) 前掲書、91頁。
- (18) 前掲書、107頁。
- (19) 前掲書、106頁。
- (20) Harvey, David, “The Experience of Space and Time”, in *The Condition of Postmodernity: An Inquiry into the Origins of Cultural Change*, Basil Blackwell, 1989, p. 205。訳は筆者による。
- (21) ブーアスティン、前掲書、103頁。
- (22) 前掲書、114～115頁。
- (23) この文脈では、「他人」として、旅行代理店や観光業者を想定しているが、以後の議論で述べるように、その限りではない。
- (24) そのことを賢明に表す例は豊富にある。例えば「観光客が正真正銘の外国文化（しばしば理解しがたい）を愛好することは稀である。観光客は、自分の偏狭な期待を満足させたがる。[...] 日本でのアメリカ人観光客は、日本のものより日本風のを捜し求める」（ブーアスティン、前掲書、117頁。傍点は邦訳版のまま）。または逆に、日本における所謂「フランス料理店」という洋風創作料理の店が、フランスの食文化とは隔たれるにも関わらず、客が求める「フランス風」の演出によって、支持を得ている。
- (25) 前掲書、127頁を参照。
- (26) 矢野智司「生成と発達の場合としての学校」、佐伯胖・黒崎勲・佐藤学・田中孝彦・浜田寿美男・藤田英典編『岩波講座 現代の教育 学校像の模索』第2、巻岩波書店、1998年、102頁。

- (27) 文化理論の研究者であるトムリンソン (Tomlinson, John) は著書において、「共有された笑い」の大衆性に言及する。そのような「連帯感」の前提について、「連帯感—文化的境界線を越えた人間性—とは、笑いという曖昧な現象から導き出した慰め程度の推理に過ぎない」という。(トムリンソン『文化帝国主義』片岡信訳、青土社、1997年、114頁。)
- (28) この時点では、提供行為と提供内容の相違を示すために、提供者により、経験の過程の消滅、異質性の回避と標準化の徹底という三つの作用を提示してきた。その結果、当人が提供された経験の受動的な消費者になったことも述べた。だが、その受動的な消費というのは、結果として現れる現象であり、その理由を提供者ではなく、提供される側(当人)に求めなければならない。よって、現代における提供物としての経験を捉えるために、経験を提供する側と提供される側について詳述しなければならない。提供から生じる当人に抛る「感得するか否か」の問題の裏返しとして「異質性を歓迎するか否か」という問題がある。即ち、異質性との関係である経験はいつも当人に受け止められ、歓迎されることは限らない。不確定性や異質性は拒絶、排除や恐怖の対象にもなりうるし、当人が異質性との関係を拒むこともある。計画性や効率性が君臨する社会では、異質性との関わりの危険性より、当人は提供物の経験的な虚構性を自ら選んだという可能性も検討しなければならない。提供物の誕生には、既述した提供者による三つの作用に加えて、利用者による異質性を回避したい願望、経験の結果を先取りしたい願望などの諸要因がどれほど絡んでいるかを考える必要はある。しかし、その課題の重要性を認識したところで、本稿では紙幅の関係上、詳述を控えざるを得ず、主に提供の問題性に焦点を絞ることにした。
- (29) リフキン『エイジ・オブ・アクセス』渡辺康雄訳、集英社、2001年、16～17頁。
- (30) Pine, B. Joseph & Gilmore, James H., *The Experience Economy*, Harvard Business School Press, 1999, p. 67 を参照。訳は筆者による。
- (31) Ibid. pp. 6, 194, 196 を参照。訳は筆者による。
- (32) その論点を余暇と自由時間の文脈で詳しく論じた拙稿「余暇と自由時間—余暇の時間性に関する一考察—」『九州教育学会研究紀要』第32巻、2004年、29～36頁を参照されたい。
- (33) その事態について文部科学省から諮問を受けた中央教育審議会(以下「中教審」と略す)は平成10年6月30日に答申『「新しい時代を拓く心を育てるために」—一次世代を育てる心を失う危機—』を発表した。それは学校や公共団体、民間団体での体験活動プログラム提供の拡大を奨励した。
- (34) 中教審答申、前掲書を参照。傍点は筆者による。
- (35) ところが、経験の過程を委ねられても、受けたがらないこともありうる。提供物としての経験が蔓延する社会に生まれ、育てられた者が、自ら経験の過程を担うことに対して、拒む可能性に留意しなければならない。すでに述べたように(注28を参照)、この論点を展開するために、当人の提供物に対する態度と受容をより詳しく考察する必要がある。
- (36) ターナー(Turner, Victor)『儀礼の過程』富倉光雄訳、新思索社、1996年、125頁。

- (37) Wilson, Bryan R. (Ed.), *Rationality*, Harper & Row, 1970, xvii。訳は筆者による。なお、ウィルソンがおそらく、そのことは合理的な表現を介しないゆえに「神秘的」と呼び、説明的ではないからして「詩的」と呼んだと思われる。よって、「一群の合理的陳述」によって保証される経験の同一性を斥け、何らかの「神秘性」や「不思議」たる本質をその代わりにおくということではない。
- (38) 別様にいえば、行為それ自体のためになされる行為。その点において、遊びに類似するのである。
- (39) Breton, Philippe, *L' utopie de la communication*, La Découverte, 1997, p. 160.

## **The Key Questions about Today's "Experience Loss": Focusing on Provision Issues**

**Gerald ARGENTON**

These last years, the educational discourse has been focusing on the "experience loss" problem and its consequences. It pointed out the fact that today's environment and lifestyle does no longer yield the experience opportunities it once had, and worried about the consequences of such deprivation. Various activity programs have been ran in schools since the late 1990s until now, with the aim to provide the above "lost experiences".

Through this paper, it will be shown that the state of experience in our time can be seen as a two-sided phenomenon, according to the context it refers to. Provided experiences are a response to a lack in the educational context, but far before that, it has appeared as a product of the service industry, offering experience opportunities that are now saturating our everyday life like never before. What is the relation between this contemporary redundancy of experience and the "experience loss" problem? More specifically, what has been lost? This paper aims to reconsider the key questions of this much decried problem, arguing that it may not be so much about a loss of experience opportunities, but about a shift in the attitude toward experience.

To explain this change, I will first define experience as a relation with the unknown through two distinctive phases, process and outcome. Any person living an experience has to pass through its process, the encounter and relation with the unknown, to be able to speak about it or share it as an outcome. But with a closer look on the structure of today's provided experiences, one will notice, as a typical trait, that the outcome is known before the experience itself did occur. Encounter and process have been erased and the individual becomes a mere passive spectator of a thoroughly planned event. This argument will be illustrated through a review of the changes in attitudes toward travel experience, and will be extended to a wider reflection on the later rise of experience provision as a mass product of the service industry, which cuts the relation between experience (as encounter) and the individual.

Replacing educational discourse about "experience loss" in a larger social context, its experience provision programs may prove to be a misleading solution. Nevertheless, other responses to the problem are possible. As a conclusion, an alternative interpretation of the meaning of "sharing an experience" is proposed.